

作り物語における「国母」の後宮と女院

藤田 さほ

はじめに

「国母」は、平安中期以降の作り物語になくはならない存在である。主人公が女性である場合、物語内の中途もしくは終盤で「国母」となることが多く、また主人公でなくとも、作り物語が宮廷という政権の場を舞台としたものである以上、「国母」は多かれ少なかれ主人公に関わる存在として登場する。これら作り物語の「国母」については、これまで沼尻利通氏を始めとして、主に『うつほ物語』（以下、『うつほ』）『源氏物語』（以下、『源氏』）といったような、作品を限った研究が為されてきてはいるものの、特に平安後期以降の複数の作り物語を視野に入れ、中長期的な「国母」像を示したものは見当たらない。そこで、今回はこのような「国母」たちについて、複数の作り物語における登場人物たちを比較・検討しながら、その大凡の全体像を掴んでみたいと思う。

また、これらの「国母」は后宮や女院といった地位を伴う存在として描かれることがほとんどである。后宮については、先行研究においては、やはり物語ごとの考察が主であるが、女院については、野村倫子氏の「物語の「女院」、素描」（『源氏物語と帝』二〇〇四年六月 森話社）、「物語の「女院」再考—平安後期及び鎌倉物語に『源氏物語』藤壺の影響を見る—」（『平安文学研究・衣笠編』二〇〇九年三月 和泉書院）における考察がある。氏は、『源氏』以降の王朝物語群において登場する女院を展望され、

その置かれる状況、宣下条件および特筆すべき点について考察された。

上記を参照しつつ、本稿では『うつほ』『源氏』『狭衣物語』（以下、『狭衣』）『夜の寝覚』（以下、『寝覚』）『とりかへばや』『有明の別れ』『苔の衣』『いはでしのぶ』『浅茅が露』『岩清水物語』『我身にたどる姫君』における「国母」である后宮と女院について、主にその①出自、②物語における位置、③落飾といった三つの観点から、その特徴を考察する。なお、『むぐら』『雫ににごる』『風につれなき』の三作品に関しては、物語の主要部分がほぼ散逸してしまっているため、また、現在本文が後世の改作かとされる『しのびね』は、適宜参照する程度に留めた。更に、『とりかへばや』の中宮は、母后として考察の対象内としたが、女春宮は国母ではないため、これを除いた。

一 女院となる国母、ならない国母

作り物語における「国母」の最終的地位は、主に先に述べたように、女院と后宮の二つである。更に詳しく言うならば、「国母」であることを大きな前提として、夫である帝が譲位もしくは崩御の後に、女院となるものと、后宮のまま留まる者がいるということである。この違いは、何故に現れるのであろうか。

考察対象とする物語の後宮と女院を、人物呼称を手掛かりに挙げてみ

ると、次の表のようになる。

表一―一 后宫となる国母

物語名	人物呼称	出自(※)	最終后位 〔推定〕	最終后位 昇進時期	夫院の 讓位時期
うつほ	后宫	関白女	〔皇太后宮〕	〔俊蔭〕以前	〔国讓下〕
うつほ	あて宮	源氏女	〔皇太后宮〕	〔国讓下〕	在位中
源氏	弘徽殿太后	源氏女	〔皇太后宮〕	〔葵〕卷	〔葵〕卷
狭衣	皇后宮	源氏女	〔皇太后宮〕	物語冒頭以前	卷四
寝覚	大皇の宮	不明	〔皇太后宮〕	卷三以前	物語冒頭以前
とりかへばや	中宮	入道関白女	中宮	卷四	卷四
苔の衣	大宮	藤氏または 源氏女	〔皇太后宮〕	〔春〕卷	〔春〕卷
浅茅が露	先坊の母后	源氏か	〔皇太后宮〕	物語冒頭以前	物語冒頭以前
我身にたどる 姫君	藤壺	今関白女	太皇太后宮	卷七	卷四

(※) 出自が父親の官職で書かれているものは藤氏

表一―二 女院となる国母

物語名	人物呼称	出自	最終后位 〔推定〕	女院となる 時期	夫院の 讓位時期
源氏	薄雲女院	先帝四宮	中宮か(※1)	〔滯標〕卷	〔葵〕卷
狭衣	女院	太政大臣女	〔皇太后宮〕	卷三以前	物語冒頭以前
寝覚	女院(※2)	関白左大臣女	中宮か	末尾欠巻部	末尾欠巻部
有明の別れ	女院	左大臣女	中宮	卷一	卷一
苔の衣	女院	関白女	中宮	〔冬〕卷	〔冬〕卷
いはでしのぶ	女院	先帝女二宮	(一品宮。臣籍 降嫁)	卷四	夫は内大臣
浅茅が露	常磐の女院	源氏か	中宮	物語前半	物語前半
岩清水物語	女院	前関白女	中宮	上巻	上巻
我身にたどる 姫君	水尾女院	前関白女	中宮	卷四	卷三
我身にたどる 姫君	嵯峨女院	関白女	太皇太后宮	卷四	卷四以前
我身にたどる 姫君	我身女院	関白女	太皇太后宮	卷五	卷四

(※1) 宣下当時、薄雲女院は后位を返上していたとする説もある。
(※2) 『風葉和歌集』の和歌と呼称より、最終官職が女院であることがわかる。

これらの物語のうち、まだ女院という制度自体が見られないうちに成立した『うつほ』は、ここでは除いて検討する。

まずは、后宫および女院の出自と、物語における位置に関して、おもに主人公との関係から比較してみる。后宫では、源氏出身は『狭衣』の皇后宮のみである。藤氏出身は『源氏』の弘徽殿太后、『とりかへばや』の中宮、『我身にたどる姫君』の藤壺がいる。物語の中では出自を示唆する記述が見られないのが『寝覚』の大皇の宮、『苔の衣』の大宮、『浅茅が露』の先坊の母后である。このうち大皇の宮の氏族については、全く触れられていない。ただし、主人公の父太政大臣は臣籍降下した源氏であって、大皇の宮の夫である朱雀院とは兄弟である。主人公の母である帥宮女には兄が一人いるが、その族にも入っていない。どちらからしても、大皇の宮は主人公とごく近い親族の可能性は低いようである。

『苔の衣』の大宮については、藤氏出身か、夫の帝とは異なる皇統の皇族の可能性がある。今井源衛『中世王朝物語7 苔の衣』(一九九七年、笠間書院) 解題では、大宮の兄弟の関白を指して「その姓氏は明記されていないが、やはり藤原氏であろう。史実の上で、この作品の成った文永年間ごろの関白は藤原氏に限っていた。」とされている。しかし、「夏」巻では、関白が病臥している子息の中納言を見舞った折に、「我が身の今日明日ただ人になりたるといふばかりこそ」と言う場面がある。宿世の比喩とも考えられるが、臣籍降下したと取れないこともない。文脈上からも、判断がつきかねる箇所である。

『浅茅が露』の先坊の母后については、これは先帝の後であって、常磐院と、先坊とが兄弟であることに触れるためであった。実際には登場せず、説明のみの人物である。よって、氏族に関する明確な記述は確認できないが、故太政大臣の姉妹であることは物語の中に見える。更に、故太政大臣の孫にあたる三位中将が、出家のため北山聖を尋ねたところ、

「大神宮に氏の神の夜昼まばりきこえ給ひてその本意かなひがたうおはします」と、論される場面が見られる。伊勢大神宮を氏神とする氏族は源氏であるから、少なくとも故太政大臣は臣籍降下した源氏、もしくはその子孫であつて、姉妹の先坊の母后は、皇女または源氏と考えられる。

一方、女院の場合は、先帝の皇女で女院となつたのが『源氏』の薄雲女院と、『いはでしのぶ』の女院である。藤氏出身では『狭衣』『寢覚』『有明の別れ』『岩清水物語』の女院、および『我身にたどる姫君』の三人である。不明なのは『苔の衣』の女院と、『浅茅が露』の常磐の女院となる。

『苔の衣』の女院に関しては、先述の大宮と同様、閑白の血縁者（閑白女）であるため、藤氏か源氏ということまでしかわからない。『浅茅が露』の常磐の女院については、出自に関する記述は無い。ただ、閑白と親しく語らつてゐる場面があること、閑白の息子夫婦の若君誕生の際には御祝いをしてゐることなどから、閑白の姉妹である可能性がある。だとすれば、先坊の母后と同じ経緯からして、源氏であろう。ただ、そうすると『浅茅が露』の登場人物のほとんどが皇族や源氏という、作り物語としては少々特異な傾向を示すことにもなる。

以上からすると、出自に関しては、后宮にも女院にも他の氏族に比べて圧倒的に藤氏、しかも閑白女が多いことには変わりはない。それ以外の氏族はごく少数で、敢えてそこに違いを認めるとするならば、后宮には源氏から立つこともあり、女院には先帝皇女の存在が認められるということになる。加えて国母から后宮となる源氏女は、『浅茅が露』のそれがそうだとするならば、成立時期とされる鎌倉中期頃まで、作り物語においては存続しているのに対し、国母から女院となる皇女は『源氏』で登場した薄雲女院の後は見られなくなる。鎌倉期に成立したとされる『いはでしのぶ』の女院は皇女の国母であるが、入内も立后もしていな

い。女院は先院の遺児であり、臣籍にある一条院内大臣に降嫁した内親王であつて、兄帝に男皇子がいなかったため、所生の若君が春宮となつて女院号を賜るといふ、史上のみでなく物語上でも極めて稀な事例であつた。また、実際には鎌倉中期までに入内、国母を経て女院となつた皇女は陽明門院禎子（一〇三三—一〇九四）のみである。時代が下れば下るほど、皇女で国母となる女院は、物語作者からは遠い存在となつてしまつてゐるのである。

また、権門出身でない女院がしばしば登場することに対しては、野村氏は先の論文で『しのびね』の女君を代表して「建春門院の、入内せず皇子を出産、皇子の即位によつて女院宣下を受けたことの影響」を読み取られ、それも無論首肯すべき御論である。一方で、これらの物語を参照すると『むぐら』や『風につれなき』のような、后位を経ないで女院となる方をむしろ例外ととらえ、白河法皇の養女待遇とはいへ、閑院流藤氏のただ人から鳥羽中宮、国母を経て女院となつた待賢門院の影響も認めて良いように思う。物語の女院の多くとは異なり、待賢門院が不幸せな晩年を送つたことは周知の事実ではあるが、それにも関わらず、待賢門院の入内は「永久例」として、しばしば後世にも吉例として抛り所とされてゐる。

ところで、史実において平安後期から鎌倉期の源氏出身の国母については、養女という形を取ることもある。後白河妃で二条の母となつた源懿子や、後鳥羽後宮で土御門の母となつた承明門院源在子などがそれである。どちらも本姓は藤氏であつて、このうち懿子は薨去後の贈皇太后宮、在子は立后せずに女院宣下を受けており、こちらも今まで見てきた物語とは齟齬がある。物語において源氏女の国母といへば、すぐに『源氏』の明石中宮が想起されよう。もちろん明石中宮は光源氏の実子であるし、また、『源氏』には以降の御代がわりが無いため、明石中宮が后宮

のままなのか、女院となるのかは不明ではある。ただ、ひとつの仮説として、中世王朝物語において主人公と敵対せず、親族として庇護者の立場に立つ后宮が多くなる背景には、物語作者らの宇治十帖への視線と共に、明石中宮の存在もあるのではなからうか。

二 主人公との関わりからみた位置

次に、后宮と女院の物語における位置について考察してみる。まずは、物語の主要人物かどうかという点である。最終的地位が后宮の者では、全編もしくは一時的にでも、物語の主要人物となったのは、『とりかへばや』の中宮と、『我身にたどる姫君』の藤壺である。『とりかへばや』の中宮は、物語の当初より男装の姫君として登場し、弟の男尚侍との入れ替えを経て、春宮の母となり中宮となった。物語を通しての主人公と言えよう。藤壺は、物語の中盤（巻四）から登場し、春宮に入内、春宮の即位と同時に中宮となり、第一皇子を産んだ。巻五、巻六では嵯峨院姫宮である女帝との共同統治のさまが描かれる。後には、物語の末尾まで二代の帝（新帝・今上）、および春宮の母として重きを成した。

主要人物というほどではないが、登場した後に主人公に対して直接、または間接的に行動を起こす者としては、『源氏』の弘徽殿太后、『狭衣』の皇后宮、『寝覚』の天皇の宮、および『苔の衣』の大宮がいる。四者とも物語に登場した時点から、院や帝の後妃であって、今上や春宮、もしくは今上の一宮の母として寄せ重き人々である。このうち、弘徽殿太后と天皇の宮とが、主人公とは直接の血縁者ではない敵役として設定されている。これに対して、皇后宮と大宮は主人公とは仲の悪くない縁者であって、対立はしない立場にある。

これらから見ると、女院という地位の登場する物語では、后位を最終

的地位とする主人公・主要人物は、二名しかいない。このうち、『我身にたどる姫君』の藤壺は、一度女院候補に挙がったが、結局は太皇太后宮となった。これは「皇后宮、また女院なども聞こえさすべけれど、思し召すやうありて、なほ太皇太后の宮に上がらせ給ふ。」とあるように、意図的に女院となるのを固辞したものであった。よって、この物語の場合は、母后の最終的地位は女院を想定していたと考えて差し支えない。

『とりかへばや』の場合は、春宮の即位は物語の末尾である。そして、この末尾部分には、中宮は登場しない。生後程無くして別れた我が子との再会という最後の重要場面を終えた後には、短い後日譚の中で、母后としての繁栄が容易に想像でき得る中宮の様子に言及する必要性はなかったのかもしれない。更には、中宮の夫君である帝についても、「帝もおりさせ給ひぬれば、春宮位につかせ給、一二の宮坊にあさせ給。」との記述のみで、讓位後の姿への言及は見られないのである。

これらから鑑みるに、作り物語において女院という地位が視野に入っている場合、物語の主人公・主要人物である国母の最終的地位は、やはり女院として設定されているのではないだろうか。最後まで后位のままの国母は、途中で女院とならない理由が述べられるか、または女院となつたと思しき箇所から末尾までが短く、登場人物として、それ以上筆を割られる必要性には欠けるのである。

では、物語の主人公・主要人物ではないが、それらとの関わりが見られる后宮はどうだろうか。先述したように、これらの人々は、物語登場時から既に当帝もしくは院の後妃であって、第一皇子または帝の母である。

『源氏』の弘徽殿太后は、ここで改めて述べるまでもないが、光源氏の父桐壺帝の女御にあたる。光源氏の母更衣とは桐壺帝を巡って敵対関係にあり、子息の光源氏にも穏やかならぬ感情を抱いていた。第一皇子が

春宮に定まる前は尚更であり、その後も朧月夜との関係や、継母の薄雲女院との、冷泉帝に対する協力体制からして、敵視することが多かった。『うつほ』の後の宮と共に、主人公の敵役として位置付けられる存在であった。

同じく主人公に良からぬ感情を抱く后宮としては、『寢覚』の天皇の宮がいる。これは、中間欠巻部において息女の女一宮が、関白（当時は内大臣）の北の方となったにも関わらず、関白は主人公の寢覚上にお心惹かれ、そちらへ通ってばかりいるためであった。この天皇の宮に弘徽殿大后の影響が認められることは、先学によって指摘されている。ただし、弘徽殿大后が皇統や政治といった公を舞台にした敵対関係とは異なり、こちらは私的な敵対関係である。これは、主人公と競わねばならない我が子が親王（男）であるか内親王（女）であるかという違いでもある。そればかりでなく、天皇の宮は寢覚上を心底憎んではない。どころか、寢覚上の類稀な美しさを目の当たりにして、「まことに、これを、内の大殿に思ひ放ちはてさせて、我が女にして、明暮見ばや。いみじき、もてあそび物なりかし。」と思うのである。しかし、結局のところ、子息である帝と関係を持たせようという企みは成功せず、天皇の宮は幾度となく関白と寢覚上との関係に憤怒する。ただし、それは、寢覚上その人を憎むというよりも、女一宮が病床についている時でも、「大臣の、かゝる折とても一つにもあらず、まぎれがちに、心そらなるさま」で、関白が寢覚上のもとへ通い続けているという状況、関白が女一宮を蔑ろに扱うことへの不満であり、怒りであった。

主人公と氏族を異にする后宮は、『うつほ』『源氏』『寢覚』というように、敵役として一つの系譜を作っている。特に『源氏物語』では、それが主人公の側に立つ存在としての女院とは、しばしば対立構造のように見なされることがある。『寢覚』でも、天皇の宮と女院とは仲が良くはな

く、女院は主に同胞である関白（男君）を通してではあるが、一応は主人公の側につく。女院と相対する存在として、これらの后宮は物語に設定されるのである。

これらとは異なり、主人公の側につく后宮もいる。『狭衣』の皇后宮と、『苔の衣』の大宮である。皇后宮は、主人公狭衣の異母姉妹にあたる。大宮は物語前半の主要人物である苔衣の入道（物語初期は中納言）の叔母である。弘徽殿大后や天皇の宮が主人公とは血縁関係を持たないのに対し、こちらはごく近い親族であって、関係も良好である。『狭衣』の皇后宮は、春宮を産むことで堀川大殿一家の権勢を揺るぎないものとした。『苔の衣』の大宮は、春宮の母である上、更に主人公の妹である女院（当時は殿の姫君）の着袴の儀において、袴を着せる役をした。また、入内した女院に文を書くよう、幼い三条帝（当時は春宮）に指導をする。これもまた、主人公一族の繁栄の後盾となってくれる存在であった。

三 女院と落飾

これらの后宮が女院とならない一因としては、落飾していないことが挙げられよう。『苔の衣』の大宮以外には、崩御あるいは物語の最後まで、落飾の記述が見当たらないのである。『源氏』の薄雲女院が、入道后宮から女院となることもそうであるが、これについては、『狭衣』や『いほのぶ』の女院がより指標となろう。『狭衣』では、物語の最初から夫の一条院は上皇であって、女院は一条院后宮と呼ばれていた。これが女院となるのは、「後の宮と聞えさせしは、尼にならせ給て、女院とこそは聞えさせし」と、尼になったことが女院となるひとつの契機になっている。また、『いほのぶ』の女院も、「入道の宮も太上天皇になすらへて女院とそきこゆるかはらぬ御身ならましかはいま一きはのきさみに

かみなきくらゐにこそきたまらせ給はまし」と、本来ならば皇太后宮となるべきところを、出家の身のため女院になっていることがわかる。しかし、史実上では落飾後に女院となるのは二条院章子（一〇二七一—一〇五）までであって、次代の郁芳門院媯子（一〇七六一—〇九六）は落飾以前に崩去、母后であつても待賢門院（一一〇一—一一四五）などは、女院号を賜つてから約一八年後の落飾である。橋本義彦氏が東三条院の院号宣下について「母后を特別に優遇するための新例を開く名分として、落飾入道のことさら強調した感が深い。」とされるように、発端はそうであつても、現実的には、落飾と女院宣下とは後代になるほど結び付きが薄れていったようである。

唯一の例外は、前述したように『苔の衣』の大宮で、これは落飾しているにも関わらず、最後まで后宮のままである。一方、『苔の衣』の女院は、落飾しないまま女院となつており、ちょうど状況が逆転してしまつたかのである。『源氏』『狭衣』『いはでしのぶ』の女院が、落飾後に女院となるのに対し、落飾せずに女院となる、もしくは女院となつた後に落飾するのが、『苔の衣』の他に、『有明の別れ』『浅茅が露』『岩清水物語』『我身にたどる姫君』の女院たちである。

このうち、『岩清水物語』『我身にたどる姫君』に登場する女院以外は、夫帝の讓位と同時に女院となつたことが示されている。これは史実上では例のないことで、近いとすれば養和元年（一一八一）正月に崩御した高倉天皇の中宮で、同年十一月に女院宣下を受けた建礼門院徳子ぐらいであらうか。しかも、これは讓位というよりは崩御の後を受けたものであつて、これほど期間を置かない女院宣下が、その後継承されたことも見えない。夫院が存命中の場合は、女院となるまでには一、二年の期間があるのが普通である。この史実との齟齬は、物語における院・女院の機能において、何等かの意味を有するものであろうか。野村氏の御論に「わ

ずかな例からではあるが」との断り書きの上、院・女院は、「二人で一對の形」を取ることもあるとされるように、物語では最も関係の深い后宮が、あたかも夫院の後を追つて女院となつたかのように描かれることがある。物語における讓位とは、即ち世代交代である。『有明の別れ』のような例外を除き、政権はどれだけ幼くとも天皇にあつて、物語は内裏を中心として展開される。史実のように儀礼において母后が必要であつたり、『我身にたどる姫君』の藤壺のように政務を執つたりする等の明確な意図が無ければ、たとえ「国母」であつても、后宮として内裏に留まることはできず、后宮としての役割は、新たな天皇の嫡后に受け継がれていくのではないだろうか。

さて、前述のように、『苔の衣』の女院は、落飾せずに女院となつた。女院となる契機は、夫である三条帝の讓位である。ここで注目されるのは、この一連の最後に、同じく三条帝の妃であつた麗景殿女御が皇后宮となつていふこと、更には春宮女御であつた苔衣の入道女が、中宮となつていふことである。「大宮」は、その呼称から皇太后宮か太皇太后宮である。物語の当初、春宮の母時代ならば、これは皇太后宮であらう。その後は皇太后宮のままか、或は太皇太后宮に上つたかもしれないが、物語内にはその描写はない。ここでは、これが地位を動かさず、女院（当時は中宮）が女院となることで、残りの后位が定まつたということである。これはやはり異様な処置であつて、本来ならば大宮が女院、女院が皇太后宮となり、それ以外の后位が順次埋まるべきである。仮にそうしたとしても、物語上の矛盾はない。そうではないのだから、ここには何等かの物語作者の意図が働いているのではなからうか。ここで、前述のように、院・女院の夫婦関係が一對の存在であるとしても、女院の方にはそれが言えるが、大宮の方からは言えない。

唯一異なるとすれば、後見する姫君の立場であらうか。大宮には三条

院以外の子供がおらず、故弘徽殿腹の女宮を養育している。大宮の夫である冷泉院は、この姫宮を大宮の甥である苔衣の入道に降嫁させようとしたが、それを一因として北の方を亡くした苔衣の入道は、出家入道して行方不明となってしまう。この姫宮は、その後も冷泉院と大宮の傍を離れず、病を得た後に落飾した。一方、女院が後見する苔衣の入道女は、女院が中宮を退いたことで、今上帝の中宮として揺るぎない地位に納まった。物語の後位は、ある程度意中の人物に譲渡したり、意向を示したりすることが可能である。これによって、女院は院の譲位と共に后位を譲渡することに成功した。大宮の場合は、譲位の折には後宮整理のために后位を降りる必要性が無く、更には姫宮が入道してしまったことで、后位を譲渡する機会を失ってしまったともいえる。后位は、落飾してもそのまま留まることが可能ではある。事実上では早い時期から円融院後の遵子や、一条院皇后の定子などの例がある。しかし、落飾後に初めて后位についた例は見られず、物語においても、先述の『いはでしのぶ』などのように、それは不可能である。ただやはり、この大宮の状況は、今回取り扱っている物語群からすれば異例であって、より詳細に検討してみる必要があるとも考える。この問題については、改めて考察の機会を持ちたい。

一方、女院に関しては、主人公・主要人物としては『源氏』の薄雲女院、『有明の別れ』の女院、『いはでしのぶ』の女院、『我身にたどる姫君』の我身女院が挙げられる。

『源氏』の薄雲女院は言うまでもなく、桐壺院の後で、継子にあたる主人公光源氏と密通を犯して冷泉帝を儲けた。『有明の別れ』の女院は、男装して宮中に出仕しながら男子のいない自家の跡取りを探し求め、それを得た後は帝に入内して国母となり繁栄した。『いはでしのぶ』の女院は、一条院内大臣に降嫁した皇女であるが、後に内大臣との仲を割かれ

た。内大臣の逝去後は、その若君が皇子を持たない兄弟の養子として帝位につき、姫君の婿取りに悩む女院の姿も描かれる。我身女院は、関白と水尾皇后宮との密通によって生まれた姫君で、父関白に見出されて入内し立后、国母、女院となり、崩御するまでが物語内の時間軸に沿って描かれている。

主人公・主要人物の女院宣下における状況は、それぞれ少しずつ異なる。子息の即位に伴って女院となるのは、薄雲女院および『有明の別れ』の女院である。ただし、薄雲女院は夫である院の崩御後且つ落飾後、『有明の別れ』では、夫院は生存しており、落飾もしていない。同じく夫が薨去、自身は落飾していて、子息の春宮立坊と共に女院となるのが『いはでしのぶ』である。我身女院は、子息の即位後は皇太后宮となり、夫院の崩御後も周囲の抑制もあって、しばらく后位に留まったまま落飾もしなかった。それから約六年の歳月を経て女院となり、程なくして入道している。

これらを整理するために、ここでは女院宣下前の后位に注目する。順当にいけば、国母が子息の即位に伴ってつくべき地位は、皇太后宮である。我身女院はそれに倣って、皇太后宮となった後に女院となる。『いはでしのぶ』の女院は、臣籍降嫁した一品宮で、本来は皇太后宮となることを落飾のために妨げられ、女院とされた。これらとは異なり、『有明の別れ』の女院は、中宮から女院となった。国母が中宮から女院となる例は、待賢門院以降しばしば見られるから、成立期がほぼこれ以降とされる『有明の別れ』の女院は、これに准じて考えられる。先述の表からもわかるように、この前後の物語の女院は、圧倒的に中宮から女院となるものが多い。

問題となるのは、薄雲女院である。しかし、「濡標」巻で「入道後の宮」とされる薄雲女院が、このとき中宮であったのか、そもそも后位に

いたのかどうかについても議論があるため、検討が困難である。一度落飾した後には后宮となった例としては、『源氏』以前には一条院皇后定子、やや後には二条院章子の例などがあるが、少なくとも『源氏』ではその措置は取られなかった。同じ「国母」であっても、后宮そのものではなく、それと同等、もしくはそれに准ずるものとして、女院という地位が設定され、これが物語における「女院」制度の発端となる。そして、落飾に関しては、『有明の別れ』『我身にたどる姫君』のように、受け継がれなかったものもあれば、『いはでしのぶ』のように、史実との齟齬がありつつも、継承されたものもあったのである。

『吾の衣』の女院は、関白家の姫君として春宮入内し、若宮を産んだ。春宮の即位と共に若宮は立坊し、自らも中宮となる。物語前半の主要人物である夫妻とは兄妹関係にあつて、二人が残した姫君を養育して、これを春宮に入れ、物語の最後まで姫君の良き保護者であつた。『我身にたどる姫君』の水尾女院は水尾帝中宮で、所生の三の皇子が春宮を経て即位する（我身帝）。恋敵であつた皇族の皇后宮の血縁者には、藤氏の后として厳しい態度を貫くが、それとは知らない我身女院に対しては、出生を訝りはするものの、敵視には至らず、我身帝の后に迎えている。孫の三条帝の代まで存命で、世に重きを成した人物である。嵯峨女院は、皇后宮腹の嵯峨帝に尚侍として出仕した後、皇后宮となり姫宮（女帝）を儲けている。水尾女院の姪、我身女院の異母姉妹にあたり、前面に出ることとは少なくとも、女帝との関係上、重要な役割を果たす人物である。

これらからすると、野村氏も指摘されるように、女院となるのは主人公・主要人物の近親者が多いと言える。そのためか、女院は后宮とは異なつて、敵役に回ることがあまりない。それは主人公らの一族の繁栄を保証する存在であり、庇護者である。女院宣下時には、中宮または太皇太后宮であつて、子息は帝である。院の譲位とともに女院となるのは、

『吾の衣』の女院のみ（『寝覚』は欠巻部分のため不明）、女院となる前に落飾しているのは『狭衣』の女院のみである。先述したように、史実上では落飾と女院には必ずしも関係のある必要はなく、これは物語の内にも踏襲されている。また、物語の女院の多くが「国母」である必要性の一端は、ここにもあると考えられる。たとえ天皇の后であつても、次代の帝の母とならなければ、一族の繁栄の礎たりえない。これは、主人公・主要人物が、男性である場合に顕著である。物語の女院は、女院である前に、まず「国母」であることが重要な条件と見なされるのである。

なお、あまり物語の主筋に関わらない人物としては、『浅茅が露』の女院と、『岩清水物語』の女院がいる。『浅茅が露』の女院は、関白の姉妹とすれば、主人公である二位中将の叔母にあたり、主人公の思慕対象となる姫宮を養育している。しかし、その姫宮が何事もなく斎宮として下つてしまつてからは、ほとんど物語には登場しなくなる。巻末の欠巻部以降に何等かの重要な役割を果たしたと考えられる要素もない。『岩清水物語』の女院は、主人公である秋の中納言の従姉妹にあたる。三条院（のち、嵯峨院に移御）の后から今上の母女院となり、幸い人として位置付けられる以外、主人公らとはほぼ関係しない。これらについては、主人公に関わる女院とあまり大差なく、物語における位置づけとしては、特別に議論の幅を持たないものとしても良からう。

おわりに

以上のように、ここでは物語における「国母」である后宮と女院との比較を、複数の物語を通して行つてみた。それぞれの物語が制作された時代情勢や先の物語からの継承・非継承を含みつつ、同じ「国母」という条件を持つといえども、后宮と女院との間には、その出自や物語にお

ける位置、落飾といった視点を設けることにより、ある一定の分類や傾向が読み取れることを示してみた。

このような視点の他にも、これら后宮や女院の全体像を捕らえるには、政治的な関与や宗教儀式、文芸活動といった方面からも照射してみ必要があることを最後に付言し、また次の機会に繋げたいと思う。

注記

- ① 沼尻利通「物語の国母：『うつほ物語』『源氏物語』を中心に」（『日本文学』八七、二〇〇二年）、同「弘徽殿太后・国母としての政治」（『むらさき』三八、二〇〇一年）、藤野智子「『とりかへばや物語』における「とりかへ」について―国母構想を手がかりに」（『国文論藻』七、二〇〇八年）、上杉香葉「『うつほ物語』後の宮考―国母と摂関家」（『国語教育研究』五〇、

二〇〇九年）など。

- ② 鈴木弘道「寢覚の大皇宮」（『解釈』第二二卷一〇号 一九六六年一月）。なお、本論文では、大皇の宮には弘徽殿太后のみならず、同じく『源氏物語』の式部卿宮北の方も影響を及ぼしているのではないかとされる。
- ③ 橋本義彦「女院の意義と沿革」（『平安貴族』一九八六年八月 平凡社）による。

- ④ 物語本文は、それぞれ以下より引用した。片岡利博『中世王朝物語全集 21 我が身にたどる姫君 下』（二〇一〇年七月 笠間書院）、大槻修・今井源衛・森下純昭・辛島正雄『新日本古典文学大系26 堤中納言物語 とりかへばや物語』（一九九二年三月 岩波書店）、鈴木一雄『新編日本古典文学全集28 夜の寢覚』（一九九六年九月 小学館）、小木喬『いはでしのぶ物語 本文と研究』（一九七七年五月 笠間書院）

（本学大学院博士後期課程）